「平安時代の教育史を考え直す：藤原頼長の学問について」

南カリフォルニア大学・博士課程
ジリアン・バーント

藤原頼長（１１２０年から１１５６年まで）という平安後期の公家衆はすごく劇的な人生がありました。藤原忠実（１０７８年から１１６２年まで）の次男で、藤原忠通（１０９７年から１１６４年まで）の弟でした。人生中、頼長は左大臣になりましたが、１１５６年保元の乱に危害の斉で、亡くなりました。彼は３６歳でした。今日、彼の遺産はだいたいその保元の乱の錯誤から作りました。「保元物語」と「愚管抄」という軍記物語に、彼の学問のことは特に批判的な展望があります。

頼長は１１３６年から１１５５年まで（１７歳から３６歳まで）に「台記」という日記を書きました。残る１２巻の中、彼の学問の活動がたくさん入っています。子供の時、あまり本や勉強に興味がなかったが、１７歳に馬に乗る間事件がありました。その斉で、運動のことがもう出来ませんでした。然れども、その時から頼長は自分の遺産や直系血族のことを考え始めました。そして、彼は漢籍を勉強始めました。

「台記」の特に興味深いことは康治二年（１１４３年）９月２９日の記事です。この記入に、頼長は１１３６年から１１４３年まで全部が読んだ本が記録しました。そのリストは１０３０巻で、經家と史家と雑家という三つの課題から系統立てました。多くは大学寮の教育課程と同じようにですが、頼長はたくさん課程に入っていない本も読みました。そして、今日残っていません本も記録しました。本リスト以外に、「台記」の中に頼長は自分の勉強の運動も記録して、大学寮や他の学者以外に、頼長は平安後期の独自な学者でした。やはり遺産は保元の乱のことから残っていますが、頼長は教育史や知的史の中に大事な人物と思います。

この発表中、私は藤原頼長の遺産を調べてと思います。「台記」という頼長の日記をよく見て、彼の学問を調べて、新し遺産を作りたいと思います。